

あらえびす賞

想いと命を繋ぐ歌と共に

滝沢市立滝沢第二小学校 5年 藤田 あかり

「真っ白な雪道に春風香る」、美しくも切ないピアノの前奏から始まるその曲は、冬から春へと変わろうとしている季節をそっと歌い出します。この歌のタイトルは、「花は咲く」今から十二年前に起こった東日本大震災の復興支援のために制作されたチャリティーソングです。作詞の岩井俊二さん、作曲の菅野よう子さんは、共に被災県の出身で、被災地にゆかりのある方々がガーベラの花を手にリレー形式で歌唱していく姿が多くの人々の印象に残っていると思います。

この歌は、震災で亡くなった方の目線で歌詞が綴られているそうです。「誰かの笑顔が見える 悲しみの向こう側に」、「誰かの未来が見える 悲しみの向こう側に」。繰り返し出てくる「悲しみの向こう側に」という言葉からは、「悲しみにくれている人も、やがていつか大切な誰かと出会い、共に歩いていく。そして、次の世代へと未来は繋がっていく。」そんな穏やかだけれども、希望がこもったメッセージが伝わってきます。

私が初めてこの歌を聴いたのは、小学一年生の頃で、テレビで震災特集を見ていたときでした。綺麗で心にしみわたるメロディーに思わずうっとりとしたことを覚えています。私が聴き入っていると、横から鼻をすする音が聞こえたので、ふと目をやると、母がボロボロと大粒の涙を流していました。私がびっくりして固まっていると、母はどこからか一枚の写真を持ってきました。その写真の日付は、ちょうど震災と同じ十二年前の一月。美しく微笑む花嫁さんと世界一幸せだという顔をした花婿さん、そして満面の笑顔を浮かべた私の母や父、祖父母も写っています。

「これは、結婚式の写真。真ん中の花嫁さんは親戚のお姉さんだよ。二カ月後の大震災で亡くなった。」

写真の中で幸せそうに微笑んでいるお姉さんが、この後たった二カ月で震災に遭い、亡くなってしまっなんて。私はあまりのショックで頭が真っ白になりました。それまで、私にとっての東日本大震災は、漠然とした怖いもの

であって、身近なものではありませんでした。お姉さんのことを思いながら聴く「花は咲く」は、もうただの綺麗な歌ではなく、亡くなった人の想いや、残された人に少しずつでも前を向いて欲しいという願いがこもった、魂を揺さぶる歌だと気がつきました。

私達の人生は、始まったからには必ず終わりを迎えます。いつかは分からぬその瞬間まで、悲しみも苦しみも全ての感情を愛おしみながら、後悔のないように全力で生きていこうと思います。「花は 花は 花は咲く いつか生まれる君に 花は 花は 花は咲く わたしは何を残したろう」ゆったりとしたメロディーは、力強く、そして一歩ずつ進んでいきます。想いと命を繋いでいくこの歌と共に、私は、私だけの花を咲かせていきます。

曲名 花は咲く
作曲 菅野 よし子
作詞 岩井 俊一

審査員講評

あらえびす賞感想文について

自分の生活の中でのつらい想いを通して、音楽によって心を動かされたあかりさんの気持ちがとても伝わってきました。「全ての感情を愛おしみながら全力で生きていく」という文には、未来にむかって生きる力強さを感じます。これからもたくさん音楽と出会ってほしいです。

教育長賞

「ごんぎつね」の音楽げき

赤石小学校 4年 佐々木 孝英

音楽の授業で、先生がこう言いました。

「今日は、国語で学習した『ごんぎつね』を音楽げきでやってみようか。」
ぼくはとてもおどろきました。つい先日、国語の学習が終わったばかりの物語を、今度は音楽の授業でげきをするというからです。

「あの『ごんぎつね』が、いったいどんな歌になるのかなあ。」
と、ぼくはとても気になりました。

この曲は、音楽の教科書の後ろの方にありました。朗読の場面から始まり、いたずらをするごんの気持ちが歌になり、また朗読で場面が変わっていく、という曲のつくりになっています。短いけど国語で学習したままの登場人物の気持ちや情景を歌で表現しています。

ぼくは、「にげて見上げた秋の空」という一番の最後の歌詞がとても気になりました。ごんは、一人ぼっちがさびしくて、ついたらずらをしてしまいます。その悲しさやさびしさ、切なさがこの言葉にこめられていると感じました。その気持ちを歌で表現したくなりました。強弱記号を見るとメゾピアノとありました。ああ、だからこの曲は、そっと終わるんだ、と納得しました。曲の表現と歌詞の言葉はつながりがあるのだと気付き、他の歌詞も気になりました。すると、「ぼくのつぐない気付いて」という歌詞のところは、クレッシェンドとデクレッシェンドで曲が大きく盛り上がるのが気持ちをこめてうたいやすいなと感じました。ごんは、くりやまつたけを持ってきても兵十は神様の仕業だと思っています。国語の教科書には「つぐないに気付いて」という言葉はなかったけれど、ごんは、強くそう思っていたことでしょうか。ごんになりきって気持ちをこめて歌える好きなところですよ。

役わりを決めるとき、ぼくは、朗読の役に立ちました。お母さんから、音読がうまいとほめられることが多かったこともありですが、そのときにくり返されるピアノとリコーダーのせんりつがとてもきれいで、それでも悲しい感じがすることも理由の一つです。このせんりつを聞きながら朗読す

ると、いつもより気持ちをこめて読むことができました。曲の力ってすごいなと思いました。

曲の最後がとても不思議な終わり方でした。ずっと悲しい曲なのに、最後はなんだか明るい感じがするのです。それを聞いて、ぼくは、もしかしてこんは生きているんじゃないか、この物語は続きがあるのではないか、と考えてしまいます。国語でもみんなで続きの物語を考えて発表し合ったことを思い出しました。終わり方だけで、こんなにふんい気がちがうのだ、ということも面白く感じました。

今回、よく知っている『ごんぎつね』を歌や音楽に合わせてげきをするのがとても楽しかったし、新しい発見もありました。今度は、ちがう物語でもしてみたいと思いました。

曲名
作曲
作詞

ごんぎつね
三宅 悠太
新井 鷗子
(原作 新美 南吉)



優秀賞

勇気をくれる歌

赤石小学校 4年 二階堂 結月

私は、歌うことが大好きです。自分の感情を表現できるからです。楽しい時も辛い時も、私のそばにはいつも歌があります。そんな私が、一番好きな歌があります。

「僕たちの言葉で世界は少しも変わらない」

これは、私が好きなアーバンギャルドという歌手の歌の中でも、特に好きな「ダブルバインド」という歌の一部です。

この部分が、私には、言葉だけでは何も変わらない。自分自身が行動していかなきや変わらないんだよ。助けてほしい、と心で思っても、それを言葉にしないと、誰も気づいてくれないんだよ。だから、勇気をだして自分から行動しよう。というメッセージにきこえます。この歌は、苦しい思いをしている子を見守っている、神様や天使たちの目線から歌われているように感じます。歌の中に、

「うさぎみたいな目してる どうしたの」

「犬みたい 息をきらせ どうしたの？」

と、問いかける歌詞があります。苦しい思いをしている子に、優しく問いかけているのです。苦しい思いをしている子にとって、優しく問いかけてもらうことは、救われた気持ちになります。自分は一人じゃないんだと気づかされ、安心します。

私は、いやなことや辛いことがあった時にこの歌を聴いたり、歌ったりします。歌の主人公になりきって、自分に問いかけて、行動しなくちゃダメなんだと勇気をもらい、前向きな気持ちで立ち直ることが出来るからです。また、見守って優しく問いかけてくれる誰かがいるはずだと、安心した気持ちにもなります。私も、うさぎのような目をして泣いている子がいたら、優しく問いかけ、安心させてあげられるような人になりたいです。

私は、将来アーバンギャルドのような歌を歌うために、ボイストレーニングに通っています。様々な曲を歌っていますが、ダブルバインドは特に、歌

っていて感情があふれてくる曲です。イントロを聴いて涙が出てきてしまったり、歌い終わったところに、いつの間にか涙がたくさん出ていたりします。そのくらい、この曲は歌詞の一つひとつが、私の心をゆさぶる曲です。

私は、この曲に勇気をもらいました。そして、言葉だけではなく、行動することが大事だということ学びました。私が歌で勇気をもらったり学んだりしたように、他の人にも、歌を通して勇気や思いを伝えたい、歌にはこんなに力があるんだということを広めたいと思いました。改めて歌手になりたいと思いが強くなりました。

私が好きなアーバンギャルドは、小説のような歌を作り、私を感じたことのない気持ちを教えてくれます。アーバンギャルドに出会わなければ、自身が変わろう、行動しようという気持ちにはならなかったと思います。この歌は、私を強くしてくれた歌です。私もだれかにとって、そんな存在になれるよう、勇気をもって行動していきます。

曲名	ダブルバインド
作曲	谷地村 啓
作詞	松永 天馬

